

第3部 「韓国」の投資環境」

講師：小林 直人
(在ソウルジェトロ海外投資アドバイザー)



《韓国投資環境の変化》

95年、96年、97年に韓国が受け入れた投資金額は、13億ドル、23億ドル、30億ドル。そして、98年は52億、99年は105億、そして今年6月まで約40億ドル。韓国から出ていった投資は95年、96年、97年については、30億、42億、30億ドルというように、投資の収支はマイナスになっています。98年、収支としては受入れがずっと多くなり、98年は13億ドルのプラス、99年は79億ドルプラス、今年もプラスになっています。これは、韓国政府の対外投資の受入に対する熱意、いろいろな施策の実行によるものと言えます。

97年末の経済危機の真ただ中、金大中政権は発足しました。金大中政権は外資の導入に非常に大きなエネルギーを費やして、外資の導入積極策をとりました。外資を導入することによって、①雇用拡大、②長期資本導入、③近代的経営ノウハウの導入、④企業経営の透明性向上、⑤輸出拡大などの効果をねらいました。

具体的には、①整理解雇の法的整備、②外国人の敵対的M & A許可、③KOTRA外国人支援センターの開設（投資手続きのワンストップサービスの提供）、④外国人土地法制定（用途、面積制限の撤廃）、⑤外国人投資促進法施行（1058の業種のうち1030業種に対しては完全開放）、⑥外国為替取引法施行（2001年には全面自由化）、⑦外国人投資オンブズマン事務所開設（経営上の問題の相談窓口）などの投資環境改善策が、韓国がこの2年半非常に大きく外資の導入を実現したということになります。

《欧米企業と日本企業の対韓投資対応》

97年までの為替は1ドル900ウォンだったものが、経済危機のときには1ドル2000ウォン。株も、最高のピークから3分の1ぐらいに落ちました。韓国の優秀な企業を2分の1から4分の1の外貨で、買うことができました。この経済危機直後、欧米企業は、この機会を捉え、金融、電子・通信分野に積極的な投資行動に出ました。これに対し、日本は、韓国投資環境変化に鈍く、韓国の対日感情、労使問題などのネガティブな先入観、対外的に出ていく体力がなかったことから消極的な対応でした。

《日韓関係の急速な改善と最近の日本からの対韓投資》

最近のトレンドや、投資をしたいという相談からも、かなり積極的に変わってきたと言えます。特に日韓政府、企業、個人の関係の緊密化ということが言えます。

韓国は全世界に対しては、アメリカにもヨーロッパにも日本にも投資を促していったわけですが、特に金大中大統領は日本と韓国の間の関係緊密化を図りました。今年年内をターゲットにしている日韓の投資協定ですが、これも韓国政府と日本政府との緊密化がベースにあります。

今、日本の企業はネガティブなイメージを持っている企業も当然ありますが、私から見ますと古いイメージがだんだん変わってきています。実際韓国に来られた企業の感覚が変わってきていると思います。

3番目には、個人の交流の急増というものは非常に大きなファクターになってきています。例えば、2002年のW杯共同開催に向けての若い人たちの盛り上がりといったものが非常に変わってきています。

《対韓投資の魅力と留意点》

対韓投資の魅力は、ダイナミズムとポテンシャル及びコスト・パフォーマンスだと言えます。確かに韓国のコストは絶対的には高いです。ただし、生産工程・管理を技術の水準とできるものを比較した場合のコスト・パフォーマンスは高いと言えます。

留意点ということ言えば、成功している企業の共通点というのは、韓国に100%であれば取引上のいいパートナー、ジョイントベンチャーであれば、経営上のよきパートナーがいるということ。こういったことが何よりのポイントだと思います。それから、常日頃から経営理念を社内で徹底する。そして、経営情報の公開を怠らないこと。そこで不信感が出てきた場合には、労使関係に非常に大きな問題が出てくると思います。

韓国と日本は、言葉も顔も行動パターンも非常によく似ています。ただ、国民性がまったく違います。あくまでも韓国も外国であるということをお忘れなく、経営・従業員の韓国での現地化をいかに図っていくかということのポイントとしていただければ成功していくのではないかと思います。